原本

令和五年度前期日程入学試験学力検査問題

国　語

文学部・教育学部・法学部・経済学部（文系）

令和五年二月二十五日　十三時三十分～十六時（一五〇分）

注　意　事　項

一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子、解答用紙を開いてはいけない。

二、この問題冊子は、二十一ページである。問題冊子の白紙のページや問題の余白は草案のために使用してよい。なお、ページの脱落、印刷不鮮明の箇所などがあった場合には申し出ること。

三、解答は、必ず黒鉛筆（シャープペンシルも可）で記入し、ボールペン・万年筆などを使用してはいけない。

四、解答用紙の受験記号番号欄（一枚につき二か所）には、忘れずに受験票と同じ受験記号番号をはっきりと判読できるように記入すること。

五、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。各問とも解答の指定字数には句読点・括弧等を含む。

六、解答用紙を持ち帰ってはいけない。

七、試験終了後、この問題冊子は持ち帰ること。

一　次の文章を読んで問いに答えよ。

資本主義の本質は、形式と化した欲望、空虚な形式への欲望にある。このことが、「手段」でしかない低級な（と見える）欲望が、高級な（と見える）規範的な欲望に一般的に勝つ傾向として現れる。要するに、低級な市場的規範が高級な規範を締め出す傾向がある。この「(ア)低級が高級に勝つ」ということがどういうことなのか、あらためて確認しておこう。

貨幣は普遍的な手段である。この点に(1)カギがある。それは（市場で得られるものの範囲内において）任意の目的Xに奉仕することができる。それに対して、高級な規範は、常に、特定の内容をもった目的aを目指している。代数学でも、変数Xは、特定値aをその一部に含む。それと類比的な論理で、高級の規範は低級な規範の中に包摂されてしまうのだ。

ところで、高級な規範は、それ自体で目的であるように対象や他者を扱うところに本質があった。低級な規範の一部になるということは、高級な規範が、何か別の目的Xの手段と解釈される、ということを含意する。だが、高級な規範の条件は、行為の対象をそれよりも上位の別の目的のための手段として相対化しないということにあった。つまり、高級な規範の対象は、終極的な目的でなくてはならない。だから、高級な規範の（特定の内容をもつ）目的aが低級な規範の不特定の（形式的な）目的Xの手段へと転換したとたんに、高級な規範そのものが、(2)アトカタもなくなるほどに変質してしまうのだ。

したがって、高級な非市場規範が市場的規範に締め出される、というイメージは、厳密にはミスリーディングである。前者は後者に包摂されるのだが、そのとたんに性質を変えてしまうのだ。たいして難しいことを言っているわけではない。たとえば、二酸化炭素の排出権を取引する制度を導入することは、地球環境の保護aという目的を、市場で金銭的な利益をあげるという一般的な目的Xのための手段として追求することを意味する。しかし、そうしたとたんに、「自然」というものを、かけがえのないそれ自体で保護に値する「目的」として(3)グウする態度は、永遠に失われてしまうのである。

われわれの社会は、市場的な規範がめざす目的Xが、いわばその変域をどんどん拡大し、非市場的な自律的目的aをのみ込んでいく社会である。それが、資本主義ということであろう。貨幣は、任意の目的Xに貢献しうる普遍的な手段である。資本主義

は、特定の目的よりも、普遍的な手段の方に魅力があるように見せるシステムだ。貨幣(＝形式)は、普遍的な手段である、まさにそのことによって、任意の特定の目的を下僕として自らに従わせることになるのだ。ここで主従の逆転が生じている。手段でしかなかったもの(貨幣)に目的たちが仕える、という逆転が、である。経済学の言い分は、貨幣(市場)は何にでも使える手段に過ぎないのだから目的の性質(目的の善さ)を変えるものではない、というものだが、実は、商品化したとたんに、主従(目的－手段関係)は反転しており、かつての主人(個々の特定の目的)からは、「それ自体で価値あるもの」としての輝きは失われてしまう。

＊

ここで、もう一例、貨幣的インセンティヴの効果についての、興味深い行動経済学の実験をサンショウ(4)しよう。ダニエル・ピンクのベストセラー *Drive*(邦訳『モチベーション3・0』)に紹介されている、ＭＩＴやプリンストン大学の心理学者が実施した実験だ。この実験では、被験者にゲームをやらせ、貨幣的インセンティヴがゲームの成績にどのような影響を与えるかを調べている。

被験者が取り組むように指示されるゲームは、多様である。数字の列を記憶するゲーム、言葉遊び、空間感覚を必要とするパズル、さらにボールを投げて輪を通すといった身体運動のゲーム等々。被験者は、二つ(または三つ)のグループに分けられる。一つのグループには、金銭的な報酬はない。もう一つのグループは、成績に応じて、金銭的な報酬が出る。後者の報酬組に関しては、さらに、報酬が小さいグループと大きいグループに分けられることもある。またしても、(イ)実験結果は、経済学の常識を覆すものだった。

課題が機械的で単純な場合には、報酬は、普通に機能する。つまり、報酬が高いグループほど成績がよい。ところが、驚いたことに、ほんのわずかでも認知的なひらめきや創意工夫が必要な課題になると、逆に、報酬が高いグループの方が、成績が悪くなるのだ。

たとえば、「ロウソクの問題」という、すでに一九四〇年代には知られていた実験がある。実験参加者は、一本のロウソク、紙箱に入った多数の画鋲(がびょう)、そしてマッチが与えられ、「ロウがテーブルに垂れ落ちないように、ロウソクを壁に付けるにはどうし

たらよいか」という課題が与えられる。この課題は、けっこう難しい。参加者は、画鋲でロウソクを壁に付けようとしたり、マッチの火でロウソクを溶かして、壁に固定しようとしたりするが、これでは、「ロウがテーブルに垂れ落ちてはならない」という部分が解決できない。この課題を解くには、少しばかり視点を変える必要がある。画鋲が入っていた紙箱を空っぽにして、画鋲で壁に固定し、その上にロウソクを立てるというのが正解だ。参加者は、当初、箱を、画鋲を入れるためにあるだけだと見なすので、「使える道具」の中に含めていない。箱も道具として与えられていたことに気づかなければ、正しい答えには到達できないのだ。このような課題では、(成績に応じた)報酬のあるグループの方が、報酬のないグループよりも、解決に、平均して三分半ほど長い時間を要した。

ところが、課題の設定をほんのわずか変えるだけで、実験の結果は変わってくる。最初から、画鋲を箱の外に出しておいて、参加者に、ロウソクと画鋲とマッチと(空の)紙箱を与えておくと、今度は、「賞金」が与えられるグループの方が、速く問題を解くことができるのだ。最初の実験の設定と後者の実験の設定では何が違うのか。後の実験では、箱はもともと空なので、正解は最初からほとんど示されているに等しく、「ひらめき」の要素がない。このような課題でのみ、金銭的報酬と成績とが正の相関になる。

この実験には、さらなる追試がある。アメリカの大学生にとって数十ドルの報酬は、もともとたいした金額ではない。そのため、貨幣的インセンティヴが利かなかったのかもしれない。そこで、同じ実験をインドの田舎でも行った。平均所得が低いインドの人々にとっては、同じ金額でも莫大な報酬と感じられたはずだ。結果はどうなるのか。アメリカで実施したときと、変わらない。単純な課題では、報酬が高いほど成績がよくなるが、少しでも独創性を必要とする課題では、報酬は逆効果である——報酬が最も高いグループの成績が最悪だったのだ。

どうしてこのような結果になるのか。(ウ)この結果をどう解釈したらよいのか。結果は、ここまでのわれわれの考察を支持し、補強するものになっている。大筋では、この実験は、先に紹介した、寄付金集めについてのイスラエルの高校生の実験と似ている。どちらも、貨幣的インセンティヴがあると、むしろ成績が下がるのだ。ただ、イスラエルの例では、行為に道徳的な善さが

あり、被験者には、道徳的な満足感、他人のために役立っているということからくる満足感があっただろう。この実験のみであれば、純粋に利他的な行為の方が、利己的な側面が入る行為よりも喜びが大きい、という解釈も可能だ。しかし、本項で紹介した実験では、ただパズルを解いたりするだけなので、被験者に、道徳的な満足感はない。

したがって、次のように解釈するほかない。まず、単純で退屈な課題は、シーシュポスの作業のようなものであって、これを解くことは快楽を伴わない。したがって、被験者には、この課題を解くこと自体を、有意味な目的と見なすことは難しい。このとき、金銭的報酬を、「目的」として与えてやると、課題を解くことへの被験者の意欲は高まる。

だが、認知的なひらめきや創造性がほんの少しでも伴う課題の場合には、事情がまったく異なる。このような課題を解くことは、ある程度は常に楽しい。つまり、被験者にとっては、この課題を解くことが、報酬＝快楽を伴っており、すでにそれ自体で目的となっているのだ。ここで、金銭的報酬が得られる仕組みを加えると、被験者には、金銭を得ることがより上位の目的となり、課題を解くことが手段に転ずる。すると、課題解決自体の魅力、それに伴う快楽が小さくなるのだ。かくして、被験者の課題解決への意欲も低下する。そのことが、創意工夫や発想切り替えの能力を制限することになり、彼らの成績を下げることになる。

*

このように、貨幣的なインセンティヴが加わると、つまり――われわれの用語に置き換えれば――形式への欲望の中に回収されると、一般に、創造的な作業に伴う魅力は低下し、そうした作業への意欲が小さくなる。

だが、(エ)ふしぎなことはその先にある。このようなことがあるにもかかわらず、資本主義の下では、貨幣的なインセンティヴが、つまり形式への欲望が、概して優位になるのだ。たとえば、技術者としての仕事がふたつあり、一方は、金銭的には無報酬で、他方は、高額の賃金が支払われるとしよう。ここまで紹介してきた実験が示していることは、前者の(技術者としての)仕事の方が楽しく、意欲もわくということである。にもかかわらず、ほとんどの人は、後者を、つまり金銭的な報酬がある方を望む。なぜか、おもしろくなく、魅力が乏しい方に、多くの人が集まるのだ。

このことは、現代社会における、「自由の蒸発」とでも呼ぶべき現象を説明する。自由は、有意味なことを選択したという自覚とともにある。もし、「それ」が意欲をかき立てない、つまらないことと感じられていれば、「それ」をなすことは、自由の行使としては自覚されない。選択肢は確かにあり、外的な制限が加えられていないのに、主体は、それを選んだことを、自由の有効な行使とは見なさない。これが、自由の蒸発である。なぜ、自由が蒸発するのか。その原因をさらに遡って考える必要がある。

（大澤真幸『自由という牢獄』による）

（注）○ここで、もう一例――筆者は本文より前の部分でイスラエルで行われた行動経済学の実験の例を挙げているため、「ここで、もう一例」と述べている。その実験は、金銭的な報酬の有無が寄付金集めの成果に及ぼす影響を見ようとするものであり、本文の別の箇所でも「先に紹介した」実験として言及されている。

○インセンティヴ――人々の意欲を引き出すために与える刺激のこと。

○シーシュポスの作業――単調でいつまでも続く実りのない仕事のこと。シーシュポスはギリシア神話に登場する人物。神々を欺いた刑罰として大きな岩を山頂に運ぶことを命じられた。岩は山頂まで上げるたびに転がり落ちるため、シーシュポスはその苦行を永遠に続けなければならなかった。

問(一) 傍線の箇所(1)(2)(3)(4)の片仮名を適切な漢字に書き改めよ。

問(二) 傍線の箇所(ア)「低級が高級に勝つ」とは、どのようなことか。これに続く本文の記述に即して三十字以内で説明せよ。

問(三) 傍線の箇所(イ)に「実験結果は、経済学の常識を覆すものだった」とあるが、ここで筆者が言う「経済学の常識」とはどのような見方か。本文の内容に即して四十字以内で説明せよ。

問(四) 傍線の箇所(ウ)に「この結果をどう解釈したらよいのか」とあるが、筆者自身はどのような解釈を示しているか。本文の内容に即して九十字以内で説明せよ。

問(五)　傍線の箇所(エ)に「ふしぎなことはその先にある」とあるが、ここで筆者が言う「ふしぎなこと」とはどのようなことか。本文の内容に即して七十五字以内で説明せよ。

二

四十五歳の服飾デザイナー瀬尾水樹は、保育園から高校までの同級生で消息不明になっている森嶋信也の行方を探すうちに、信也の弟である悠人の連絡先を知る。彼女は悠人の職場の近くの公園で彼と会い、信也が競輪学校に入ったことを知らされる。文章を読んで問いに答えよ。

「水樹ちゃん、ぼくって昔から変わっていたでしょう?」

「え?」

「ぼくには生まれつきの脳の機能障害があるんです。大人になってわかったことですが、ぼくにはその機能障害があって、だからこれまで集団の中で生きるのが難しかったのだそうです。正直……ほっとしました、それを知って。兄も専門医からその話を聞いた時、長い苦しみから抜け出たような顔をしていました」

知的な能力には問題がなくても、人づきあいがどうしても苦手な人がいる……それが自分だったのだ。それは本人のせいでもなく、生まれ持った資質なのに、自分がまだ幼かった時代は教師にもそういう性質の子供たちに関する知識がなかった。三十歳を過ぎた頃になって、発達障害という言葉が聞かれるようになり、それはひょっとしたら自分自身のことではないかと思った。兄と二人で専門医を受診し、検査を受けた。医師から答えをもらった時は戸惑いよりもむしろ安堵のほうが大きかったのだと、悠人は深く頷くようにして告げた。

「発達障害……悠ちゃんが……」

水樹は悠人の横顔を見つめながら、彼が幼かった頃のことを思い返す。

いつ見てもひとりぼっちだった。同級生の男の子たちが遊んでいるのを、自分の姿が見つからないように離れた所から眺めていた。羨ましそうに……でも少し怯えて。本当は悠人が一番、友達と仲良くしたかったのだ。でもうまくできなかった。うまくやりたいのに、うまくやれない。怒らせるつもりも苛立たせるつもりもないのに、あいつはわけのわからないやつだと、周りが離れていってしまう。彼を取り巻く大人たちも、悠人が人とうまくなじめないことを、彼自身の責任にして自分たちの役目を

終わらせていた。水樹だってそうだったし、悠人の母でさえそうだった。信也だけが、弟を守り抜いた。

「悠ちゃんは今はどんな仕事をしているの？」

「産業技術、総合研究所、という所で働いています」

悠人は区切るようにゆっくりと答えた。一度聞いてもすぐには憶(おぼ)えられないような名称だった。

「そこのエネルギー技術部門で研究員をやっています。今は人工光合成の実用化の研究に携わっています」

「人工光合成？」

「はい。人工光合成が実現すれば、太陽光発電やバイオ燃料に続く新たなエネルギーとして利用できます。太陽光発電は効率も高く今は主流ですが、やっぱりコストが高いところに難点があるんです。バイオ燃料はトウモロコシのような生物が生産するエネルギーを利用するから、その変換効率の低さが問題です。人工光合成の技術は、太陽電池と生物の光合成のいいところを利用しようといったところなんです」

それまでたどたどしく話していた悠人の口調が急に流暢(りゅうちょう)なものになる。自分の好きなことを語る時に周りが何も見えなくなる一途(いちず)な性格はいまでも変わらず、でもそんな特質を生かした仕事に就いたのだなとその話に聞き入った。どこへ行ってもみんなに軽くあしらわれ、いじめられ、いつも泣き出しそうな顔をしていた悠人が胸を張って自分の仕事について語っている。

「私、理系のことはまったくちんぷんかんぷんで悠ちゃんの説明はよくわからなかったけど、悠ちゃんが自分の好きなことを仕事にしてるんだということは伝わったよ。頑張ってるのね」

水樹は胸の前で手を合わせ、音を出さずに拍手をした。幼い悠人が何か頑張って成功した時、いつもそうやって褒めていたのを思い出したからだ。

悠人はそんな水樹のことをじっと見ていたけれど、少し(1)顔を曇らせて、

「ぼくがいたから兄は思うように生きられなかったんだと、大人になって気がつきました。上の兄の事故も、母が自分や兄に冷たくなったのも、自分がこんなふうだからだと、わかったんです。水樹ちゃんが遠くに行ったのも、ひょっとしたら自分のせ

いかもしれないと考えること……ありました」

と急に声のトーンを落とした。「この歌、憶えていますか？」

ドはどりょくのド、レはれんしゅうのレ。ミはみずきのミ、ファはファイトのファ、ソはあおいそら、ラはらっぱのラ——。

周りに人がいないことを確かめた後、悠人は小さな声で歌い出す。水樹は首を傾げてそんな彼の口元を見ている。

「水樹ちゃんがいなくなってから、(ア)ぼくにはミの音がなくなりました。ミは大切な音でした。楽しくやっていてもふとミの音が抜けていることに気づいてそこで止まってしまう。水樹ちゃんのいないぼくの生活はそんな感じでした」

悠人はかすれた声でそう呟くと、すいません、久しぶりに会ったのにこんなことを話して、と頭を下げる。水樹は、自分があの町を離れる時にどれくらい悠人のことを思いやったか考えてみた。ほとんど、何も、考えていなかった。残される人の気持ちなんて、自分が飛び出したい衝動に比べたらあまりにも小さいものだった。信也と水樹だけを頼りに生きていた十代の悠人だった。学校ではほとんど言葉を発さずに過ごしていた悠人だった。水樹を見かけると、全身で喜びながら駆け寄ってきて、途切れることなく話しかけてきた。水樹は悠人の孤独を知っていたはずなのに、いともたやすく別れてしまったのだ。

東京に、一度行ったことがあるのだと、悠人は苦笑する。半田に移り住んだ年の冬に、兄弟で生まれて初めての新幹線に乗った。

水樹の通っている服飾専門学校を見つけて、入り口のすぐ近くまで行ったけれど、それ以上中に入ることはどうしてもできなかった。行き交う学生たちがあまりにもきらびやかで、別世界の人たちに思えて。

「信ちゃん、あの人、鳥人間コンテストに出てくる人みたいやな」

緊張してそんなことを口にしたのを憶えている。傍らの信也は、何も言い返さなかった。自分たちの着古したジャンパーを、通り過ぎていくみんなが見ているように感じた。水樹に会えたら、東京で一泊してディズニーランドにも連れて行ってやると信也は約束してくれていたけれど、結局は新宿の喫茶店でスパゲッティを食べた後、夕方の新幹線で帰った。(イ)約束を守らなかった信也を責めることなどできなかった。

「水樹ちゃん、昔、大富豪というトランプの遊びをしたのを覚えていますか？　大富豪のルールで、プレイの前に大貧民が大富豪に一番強いカードを二枚差し出さないといけないっていうのがありましたよね。一番強いカードを二枚も渡したら、やっぱり大貧民は勝てないです。大貧民が大富豪に勝つには、よほど運が良くないと無理で。そんな感じでした。あの頃のぼくたちは、もともと良くない手札から、その中でもましなカードが容赦なく奪われていく――田川というのは、母の旧姓なんです。母の再婚でぼくたち兄弟はいったん古瀬という姓を名乗りました。でも、借金取りから逃れるため、母は古瀬と偽装離婚をしたんです。古瀬自身は住民票を移せなかったんで、母が旧姓の田川に戻り、母子家庭を装ってぼくを転校させました。もうぼくたちは顔を上げて外を歩けない、そんな気持ちでした。水樹ちゃんに会う勇気が出なかった兄の気持ち、ぼくにはわかるんです」

「全然知らなかった。会いに来てくれてたなんて」

喉の奥が熱くなってきて、水樹は両手で頬を抑え込むようにして俯く。水樹の通っていた学校には、授業が終わるとそのままネオン街に繰り出せるよう、鳥の羽を模倣したストールや、体の線に張り付くようなドレス姿で登校してくる学生たちが大勢いた。みんな誰よりも目立とうと、うずうずしていた。彼らの奇抜な装いは、悠人と信也の目に、どう映ったのか。

悠人が、今日会いに来てもらって本当にうれしかったと自分の手元にあった視線を、水樹の顔に向ける。もう昼休みが終わるから行かなくてはいけないという彼の言葉にも、水樹の思考は止まったままだ。

「兄は……」

悠人の声に、慌てて頭を上げた。

「兄は今、試合の最中なんです。試合期間中は外部との接触を禁じられていて携帯もつながりません。だから水樹ちゃんから連絡をもらったこと、伝えられてないんです」

悠人がすまなそうに告げるので、水樹は「いいの、いいの」と首を振った。

「信也の連絡先、教えてもらっていいかな？」

水樹は心の中に用意してきた言葉を、悠人に伝える。緊張で声が震えた。悠人は嬉しそうに頷き、胸ポケットに入れてあった

黒い手帳を開くと、

「今日は最終日だから会えますよ。夕方の五時三十五分からの出走なので、いますぐ新幹線に乗れば間に合います」

と急かすように水樹の手を取る。

「向日町競輪場です。憶えてますよね？」

悠人の言葉の意味に気づき、水樹が驚いていると眼鏡の奥の目が細くなった。(ウ)強い願い事がある時に見せるその表情は見覚えのあるものだった。

「名古屋からだと京都まで一時間もかからないし。そうだ、これ渡しておきます」

と慌てた様子でジャンパーのポケットに手を入れると、封筒を取り出す。

「手紙？」

宛名に、瀬尾水樹様と書いてある。郵便局の転居先不明のスタンプが封筒の右上に押してあった。

「兄が書いていた手紙、ぼくがずっと持っていました。もうずいぶん昔のものですけど」

封筒を裏返すと、森嶋信也と書いてある。懐かしい字で。

「これ……私が前に住んでいたマンションの住所」

「届かなかったんです。勇気を出して書いただろうに、届かなかったから……」

ずっと水樹に連絡を取れないでいた兄が、やっと出せた手紙だった。なのにその手紙は水樹の手に届くことなく戻ってきて。兄は戻ってきた手紙を、何も言わずにゴミ箱に捨てた。自分は兄に黙って手紙を拾い上げてずっと手元に置いていたのだという。封も開けられないまま捨てられるなんて、手紙が……兄の想いがあまりに(2)不憫だから。

「やっと水樹ちゃんに届いた」

悠人は言うと、そろそろ昼休みが終わる頃だと、立ち上がる。

「兄はきっと、水樹ちゃんが自分のことを怒っていると思ってます」

「怒ってる？」

「水樹ちゃんとの約束を守らなかったから」

「そんなこと」

水樹が呟くと、悠人は頭を下げて行こうとする。

水樹は「会ってくれてありがとう」と彼の背中に向かって声をかけた。悠人は振り返り、ぎごちない仕草で手を振る。特徴ある歩き方は子供の頃そのままだ。月面を歩く宇宙飛行士のような、どこか空を踏む不器用なその歩き方で彼はここまで生きてきたのかと思い、その道程にどれほどの苦難と努力があったかと思い、その背が見えなくなるまで見つめていた。

まだたっぷり時間はあるから、ちゃんと考えとき。大人はさ、あっという間に歳取った、ってよく言うやろ？　でもそれは違うと思う。人は急に歳を取るわけやないんや。おれら子供はゆっくりと、歳を取っていくんや——。

正浩ちゃんの言葉が(3)蘇る。ドはどりょくのド、レはれんしゅうのレ……意味もはっきりとはわからないのに歌っていた悠人の澄んだ高い声。(エ)最後のフレーズはオリジナルのままの、シはしあわせよ……さあ歌いましょう、だったことを思い出した。

（藤岡陽子『手のひらの音符』による）

（注）○ドはどりょくのド——信也が悠人のために作った「ドレミの歌」の替え歌の最初の部分。

○向日町競輪場——悠人の家族と水樹の家族が住んでいた団地の近くにある競輪場。

○水樹ちゃんとの約束——信也が、地元の京都を離れて東京の専門学校に行くことになった水樹に対して、必ず会いに行くと言ったこと。

○正浩ちゃん——信也と悠人の兄。小学生のときに交通事故で亡くなった。

問(一)　傍線の箇所(1)(2)(3)の意味を文脈に即して簡潔に記せ。

問(二)　傍線の箇所(ア)に「ぼくにはミの音がなくなりました」とあるが、悠人はここでどのようなことを伝えようとしているのか。本文の内容に即して四十五字以内で説明せよ。

問(三)　傍線の箇所(イ)に「約束を守らなかった信也を責めることなどできなかった」とあるが、それはなぜか。本文の内容に即して四十五字以内で説明せよ。

問(四)　傍線の箇所(ウ)に「眼鏡の奥の目が細くなった」とあるが、ここで水樹はこの表情を悠人のどのような気持ちを示すものとして捉えているか。本文の内容に即して三十字以内で説明せよ。

問(五)　傍線の箇所(エ)に「最後のフレーズはオリジナルのままの、シはしあわせよ……さあ歌いましょう、だったことを思い出した」とあるが、このとき、水樹はどのような心情であったと考えられるか。本文全体の内容を踏まえて九十字以内で説明せよ。

三　次の文章を読んで問いに答えよ。

(ア)禅意を得たりと言ふ者あり。「いかにして得給ひし」と問へば、「我がこの身は天地のものにて、我といふものはなし。我なければ敵もなし。これを、かの浩然の気とも言ひおき給ひしなり」と、高く心得て言ひてけり。「いかにしてその所を得給ひしか」と言へば、「思ひ思ひてつひに得しなり」と言ふ。聞きたる人、いと笑ひて、「さまざまひじりも説きおかれけれど、かかる所得てし人は、今の世にあるべしとも思ほえぬばかりまれなるを、いまだそのことごとも知り給はで、いかで得給ふべき」と言へば、腹立ちて、「(イ)知らざらん人はいかに言ふとも、我こそ得しものを、などて君はしか言ふ。我が得ざることを知り給はば、言ひ述べ給へ」と、声ふるはして言ふにぞ、「それ見給へ。怒りをもいまだ捨て得ずして、この身を捨てしとのたまふか。ことに色と酒とにふけり給ふと聞きぬ。それだに勝ち給はで、我が身に勝ち給はんとや。よし勝ち得しとても、忘るてふことは、いと難きことなめりかし。得しと思ふもの、いかで得ん。君はもののふなれば、弓射ることもて言はん。(ウ)よく引きてよく放つが外に、弓の道はなし。かくすればよく当たるを知りても、さは出で来ぬはいかにぞや。勝ち負け争ふ時、人多く当てぬる折なんどは、ただそれに勝たまほしく思ふぞかし。また早く放つ弓の病もあり。放し得難き病もあり。いづれも心の外なるものぞかし。また弓弦のゆるみて我が耳を打てば、いとど懲りに懲りて、またや耳打たんかと思ふぞかし。耳を捨つることもえせず、遅く放ち、早く放つことだに心にまかせず、人に負くるの口惜しさをもいまだ捨て得ずして、いかでこの身を忘れ給はん。とにかく今は身に行ふことは積もらで、(1)口のみ高くなり行きぬ。あるやんごとなき人ありけり。剣の道を得てしとて、みづから世にならびなしとのみ、つねに言ひ給ひてけり。ある日、書屋に居給ふ時、末の間の障子を開き、跳り出でたるを見れば、大きなる男の赤裸になりて、君を目がけてとびかかるを、『いで心得たり』とて、刀抜きて切らんとすれば、跳り越え、あるは伏し、左へ避け、右へ走りなどして、いかにも打ち得ず。とやかくするうち、すらすらと走り寄りて、その刀を取りてければ、口惜しさかぎりなく、いかにせんとあせり給へば、かの男、畳にひれ伏してけり。よく見給へば、外衛の臣下なり。その者の言ふ、『君は剣の道、よくは心得給へども、いまだもぬけし位にも至り給はず。さるゆゑに、みづから負うて得てしとのみ思ひ給ふ。まこと

に得し者は、誰(たれ)かよきと思ふべき。さる御心にてましまさば、いかなるあやまちかし給はん。臣は剣の道、さして習ひしにはあらねど、死をきはめてすれば、臣をだに打ち給ふこともなり難かりしぞかし。(エ)これをよくよく思ひ給はば、御身のあやまちもあらじ』と、涙こぼいて言ひしかば、君もことに感じ給ひて、我が(2)むげにつたなかりしことをさとり給ひしとぞ。よくこれらのことを聞き給ひて、さとりとやらんの道はやめ給へ」とか言ひしとかや。

（松平定信『花月草紙』による）

（注）○ひじり――聖人。　○もののふ――武人。武士。　○さは出で来ぬは――そうはできないのは。
○書屋――書物を置いて、読書、勉学等を行う家屋や部屋。
○外衛の臣下――主君に側近としてではなく仕えている家臣。
○もぬけし位――抜きん出てすぐれた境地。

問(一)　傍線の箇所(1)「口のみ高くなり行きぬ」、(2)「むげにつたなかりしこと」の意味を文脈に即して答えよ。

問(二)　傍線の箇所(ア)「禅意を得たり」とは、どのような境地のことを言っているのか。本文の内容に即して三十字以内で説明せよ。

問(三)　傍線の箇所(イ)「知らざらん人はいかに言ふとも、我こそ得しものを、などて君はしか言ふ」を、意味が通じるように適宜言葉を補って口語訳せよ。

問(四)　傍線の箇所(ウ)に「よく引きてよく放つが外に、弓の道はなし」とあるが、こうした「弓の道」の妨げとなることとして何が挙げられているか。本文の内容に即して六十字以内で答えよ。

問(五)　傍線の箇所(エ)「これ」は、どのようなことを指しているのか。本文の内容に即して六十字以内で説明せよ。

四 次の文章は、南宋の文人、葉適の『水心文集』に収められている「留耕堂記」の一節である。読んで問いに答えよ。なお、設問の都合上、一部訓点を省いたところがある。

(A)「但存二方寸地一、留二与子孫一耕。」余孩稚時、聞二田野伝誦一、已識二其趣一。出二游四方一、所レ至閭巷、無レ不二道レ此相訓切一。今葛君自得遂取以名レ堂、蓋(1)其詞意質而勧戒深、殆非下文二於言語一者所中能窺上也。

(2)凡人衣食、居処、嗜好之須、(a)当身而足、則所留固狭矣。然而念迫二於室家一、莫二之贏一焉、愛牽二於子孫一、不レ能レ業焉。四民百芸、朝営暮逐、各競二其力一、各私二其求一、(ア)雖危而終不懼、已多而猶不レ足者、以二其所レ留不レ止二於一身一故也。嗟夫、若(b)是則誠不レ可レ禁已。雖レ然、其留者(イ)則必与是心俱。彼心不レ喪、術不レ謬。阡連陌接、谷量山積、而隠二諸方寸之小一、無レ慙焉可也。不レ然、則貨雖レ留而心不レ足二

以留也。留之家、家不能受、留之子孫、子孫不能守。甚至刑禍戮辱、水火盗賊、俄反顧失之、皆是也。故広欲莫如少取、多貪莫如寡願、有得莫如無争。貨雖不留、心足以留也。豈惟田野閭巷、而士君子何独不然。

（葉適『水心文集』による）

（注）○方寸地――ほんのわずかな広さの土地。　○孩稚――幼児。　○葛君自得――南宋の文人、葛自得。
○贏――余分に残す。　○不能業――相続させる遺産が十分ではないということ。
○四民百芸――さまざまな身分や職業の人々。　○阡連陌接――田畑が広いこと。
○谷量山積――財産が多いこと。　○方寸之小――ここでの「方寸」は心のこと。

問(一)　傍線の箇所(1)「蓋」、(2)「凡」の訓み方を、送り仮名を含めてすべて平仮名で記せ。現代仮名づかいでよい。
問(二)　傍線の箇所(ア)「雖危而終不懼」、(イ)「則必与是心俱」をすべて平仮名で書き下せ。現代仮名づかいでよい。
問(三)　傍線の箇所(a)「当身而足、則所留固狭矣」を口語訳せよ。
問(四)　傍線の箇所(b)「是」とは、どのようなことか。本文の内容に即して三十五字以内で説明せよ。
問(五)　傍線の箇所(A)「但存方寸地、留与子孫耕」について、筆者はこの言葉をどのような教えと捉え、どのように生かすべきだと考えているのか。本文全体の内容に即して六十字以内で説明せよ。